

注意報第 1 号

イチジクヒトリモドキ

(平成 20 年 6 月 13 日)

1 発生作物 いちじく

2 発生地域 羽曳野市、柏原市

3 発生の状況

- (1)大阪府内では平成 19 年 10 月に初めて被害を確認した。
- (2)平成 20 年 6 月 11 日に調査したところ、柏原市円明、羽曳野市誉田のいちじくほ場で発生を確認した。
- (3)昨年はいちじくの結果枝が充分生長したあとの発生だったが、本年の発生時期は早く、結果枝や果実が食害を受けることで、大きな被害となる恐れがある。

4 形態

- (1)卵は淡黄色で直径約 0.8mm のまんじゅう型をしており、葉裏に 30～60 個の卵塊として産み付けられる。
- (2)若齢?中齢幼虫(図 1)は、胴部背面が全体に白っぽく、頭部は黒色、体の側面は橙色である。
- (3)終齢幼虫(図 2)は、体長約 40mm で、頭部はつやのある黒色、胴部背面は灰色がかった黒色で、腹面は橙黄色を呈する。刺毛基部は橙黄色で、刺毛基部からは白く長い刺毛が 1 本ずつ生える。
- (4)成虫(図 4)は、開張 50～70mm で前翅が淡褐色の地色に橙黄色、黒色、白色の斑紋、後翅は黄色の地色に黒色の斑紋を有する蛾である。

5 生態及び被害

- (1)本種はヤガ科ヒトリモドキガ亜科に属する南方系の蛾である。
- (2)幼虫の寄主植物としては、クワ科イチジク属のイチジク、イヌビワ、オオイタビが報告されている。本府ではイチジクで発生している。

- (3)卵は、若い葉の裏に卵塊として産卵される。
- (4)若齢?中齢幼虫(体長約 20mm まで)は集合性が強く、主に葉裏に群生し食害するが、生育が進むにつれて分散し葉表にも生息するようになる。若齢では葉裏から表皮を残して食害するため、葉脈間に白い膜が残る。
- (5)中齢～終齢になると太い葉脈を残し、葉のほとんどを食いつくす(図 5,図 6)。
- (6)葉が少なくなると果皮も食害するようになる。
- (7)老熟した幼虫は、樹下の土中の浅いところで土繭を造って蛹化する(図 3)。
- (8)蛹から羽化した成虫は、昼間は葉裏に生息し、夜間活動する。

6 発生状況

日本国内では沖縄県以南では土着とされている。本州では、昭和 37 年に静岡県浜松市で採集された記録が初めである。

平成 11 年に愛媛県で発生が確認されて以降、岡山県、香川県、徳島県、広島県、高知県、兵庫県、島根県と 19 年 11 月に鳥取県で発生したことが報告されている。

近年、発生が拡大する傾向にある。本種は南方系の蛾であるため、冬の低温に弱い、四国の一部では施設内や野外で蛹での越冬が確認されている。本府にて野外で越冬するかどうかは未確認であるが、今回の発生状況から、露地や施設内など越冬した可能性が高い。

7 防除対策

- (1) 越冬世代成虫の発生時期は愛媛県で 5 月と推測され、第 1 世代幼虫は 5 月下旬から、第 2 世代幼虫が 7 月中旬、第 3 世代幼虫が 8 月上旬、第 4 世代幼虫が 9 月中旬以降に発生すると予測される。
- (2) 幼虫は若齢～中齢幼虫の間は群生して加害するため、幼虫が分散する前に寄生葉を取り除いて処分する。
- (3) 発生初期に以下の適用薬剤を処理する。

薬剤名	希釈倍率	使用時期	総使用回数
アディオン乳剤	3,000 倍	収穫前日	2 回以内
モスピラン水溶剤	2,000 倍	収穫前日	3 回以内
デルフィン顆粒水和剤	1,000 倍	収穫前日	4 回以内

8 参考文献

窪田聖一・金崎秀司(2001). 愛媛県におけるイチジクヒトリモドキの発生. 四国植物防疫研究 36 : 69-74.



▲図1 イチジクヒトリモドキ若齢幼虫



▲図2 イチジクヒトリモドキ老齢幼虫



●
▲3 イチジクヒトリ
モドキ 蛹



●
▲図4 イチジクヒト
リモドキ 成虫



●
▲図5 イチジクヒト
リモドキの食害



▲図6 食害が激し
いと樹が丸坊主に
なる